

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0471500835		
法人名	社会福祉法人 田尻福祉会		
事業所名	認知症高齢者グループホームひだまり	ユニット名	
所在地	宮城県大崎市田尻大貫字境36-1		
自己評価作成日	平成25年 8月31日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

平成14年4月に公設民営で開設された我がホームは「もう一つの我が家での喜びと安らぎのある生活～のんびり・ゆったり・私らしく～」を理念に掲げています。近隣の幼稚園と小学校とは、定期的な交流を持ちながら行事への招待もいただいています。また、定期的なボランティアさんの訪問は、利用者と共に職員も心待ちにしている、特にお花見会などのイベント時にも活躍されています。地域の方々との関わりも区長さんや民生委員さんを始めとしてたくさんの方からお力添えをいただきながら、地元のお祭りにも出演者として参加しています。昨年度からは、夜勤職員2名体制と医療連携体制を整備して、今まで以上に安心や安全に配慮しながら、今年度の事業運営目標としている「想いをカタチに」を職員のチームワークを活かしながら実践しているところです。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

基本理念を受けて、日々のケアのあり方を職員全員で検討し、今年度の事業運営目標を決めている。ボランティアの活動や運営推進会議の委員構成からも伺えるように、地域、行政、公共機関等、幅広い組織との連携があり、ホームの存在感を感じ取ることができる。法人として取り組んだ「夜間2名体制」や「職員1提案制度」は、職員の意欲を高め、入居者と職員との信頼関係の向上へと繋がっている。ホーム内は清潔感が感じられ、衛生的であり職員が生き生きして家庭的であり、「安心して任せられる」との声が家族アンケートに多く見られた。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成25年9月11日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 認知症高齢者グループホームひだまり)「ユニット名

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の基本理念を基に年度毎に事業運営目標を設定し、計画立案をし、理事会の承認を得て実践につなげている。	目標を「想いをカタチに」と決め、入居者の様々な言葉や態度からの気づきを大切にしてい、カタチを結果として残すことが出来るような取り組みを目指している。日々の取り組みを、具体的に掲げ取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	玄関先に季節の生け花をして頂く、野菜を頂く、冬季のイルミネーションの寄付を頂くなど気に掛けてもらいながら地域の行事(夏祭り、かんぼやま祭り、運動会等)に参加しながら地域とつながりを深めている。	入居地区の若者が中心に活動している「かんぼやま委員会」から全面的な支援を受けている。毎月、清掃や歌、ドライブの支援等「なんでもボランティア」が来所している。地区の祭りでは、ステージで歌った入居者もいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の方々の相談には、個別に対応している。認知症キャラバンメイト研修修了者が、大崎市高齢者地域介護予防活動支援事業に講師として参加している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年間6回の開催を計画しながら、時事の出来事や利用者や職員の日常の報告等をしている。参加者それぞれの立場からも報告や意見をいただきながら会議をしている。	毎回、市からの参加もある。駐在の巡査長も委員として参加、交通、防犯関係の情報提供をしている。開催日程の調整に苦労し、行事に併せた開催が中心となっており、同じ月で2回開催もあるので、検討願いたい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	公設民営での開設、大崎市からの指定管理を受けている事で、決算事業報告もしている。協力できる事、大崎市認知症地域支援推進チーム等にも参加している。	旧田尻町の「スキップ構想」を受けて、医療行政の連携を目的とした責任者会議が毎週開催されており、施設長が参加している。更に、大崎市の施策である「あんしん相談員」が年2回来所し、情報交換をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全職員が、身体拘束とリスクマネジメントとの関係性が理解できるように内部研修等で研修をし、ケアに活かしながら取り組んでいる。	身体拘束の目的に「怪我をさせない」とあるが、どうあるべきか、について毎年全職員で議論している。外部研修を受けた際は、研修報告で全職員が共有している。職員は、身体拘束の影響等について、良く理解し、対応している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部研修を開催しながら、職員がどのような時に虐待と感じるか、不安を感じるか等を話し合いながら意識統一し、防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修を通じて、理解を深める努力をしている。また、必要に応じて相談するようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約書や重要事項説明等必要関係書類の説明を納得し、理解していただけるように話し合いをして出来る限り、不安や疑問が解消されるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	外部評価結果を運営推進会議で報告して意見や要望を聞く機会を設け運営に反映させている。大崎市あんしん介護相談員の受け入れもして意見を伺っている。	全面的にホームを信頼し、お任せの体があり具体的な提案は殆ど無いことが家族アンケートで分る。一部の入居者の家族から、服装を定期的に取り替えて欲しいとの要望があり、適切に対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年2回の人事考課制度では、職員が事業計画に基づき個人目標を設定しているが、担当業務や日常業務からも改善提案制度を利用しながら反映させている。	法人の制度として、「改善提案制度」がある。毎年1社員1件以上の提案が義務で、職員同士の情報交換で刺激しあい、職場のコミュニケーションアップにもなっている。採用された提案には、金賞の1万円の褒賞金がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年間2回の人事考課制度では、自己評価から全体評価で、個人の実績や努力を評価しながら給与に反映されるシステムを活用し、職場環境改善にも努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の経験年数に応じた外部研修の受講をしながら、内部研修の場も設けている。日々の業務でも必要に応じてアドバイスできるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宮城県GH協会に加入していて、GH協会主催の研修参加や交換研修をしながら情報交換している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス利用前には、必ず本人にお会いして、心身の状態や想いを汲み取るようにしている。不明な点は、家族からの情報で確認しながら、安心できる場所として実感されるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでの経過も含め、サービスの利用状況や家族の考え、要望を伺いながら、信頼関係が早く作れるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の心身の状態を把握しながら、出来る限り柔軟な対応を考えてる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	される人、する人ではなく、人生の先輩として敬いながら、職員は聴く姿勢を持ち、安心して落ち着いた生活が出来るような支援を心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	双方が、それぞれにどのように思い、考えているかを受け止め、家族の協力をいただきながら、本人を支え、関係を継続できるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所前からの馴染みの美容院に出掛ける、何十年来の友達が来所したら話しやすい状況を整える、実家方面にドライブに行く等のように個人に合わせた対応をしながら支援に努めている。	一人ひとりの認知症の状況に合わせた対応を基本に、把握している想いの中から声掛けをして、その機会をつくる時もある。友達の訪問があった場合には、居室でお茶やお菓子の楽しい時間を過ごす人もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性についての情報を共有し、職員が臨機応変に対応できるようにして、日々穏やかな気持ちで過ごせるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の事業所に入所された利用者に関する情報交換をしたり、その後の家族の思い等も把握しながら対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式を利用したり、日々の関わりの中での会話から判断し、早めに解決できるように対応している。毎月のカンファレンス、必要時の話し合い等でも検討している。	入居時のアセスメント結果の他に、日々の行動等を「私の生活シート」に本人の言葉で記録し、何を考え、何を求めているのかを感じとっている。話し合いの中で、パチンコの話が出て、パチンコを楽しんだこともある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族や関係者からも聞き取りをしながら、情報を集約してこれまでの生活状況の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人毎の記録を活用しながら、生活リズムを捉え日々の体調管理に考慮し、関わりの中から見極められるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日常生活の関わりで、本人や家族の想いや意見を聴きながらカンファレンス等で意見交換をしてより良いケアにつながるように介護計画を作成している。	1週間の生活状況を細かに記録した「生活様子ノート」には、寝ながらブツブツ言っている、いびき、叫び声、テレビを見て大声で笑った、ニコニコしていた等具体的に記入しており、介護計画作成の基になっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	2種類の記録シートを使い、職員の気づきが、個別ケアに活かせるように情報の共有や介護計画の見直しにつながるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の要望や状況をよく理解しながら、その時点で出来る限りのニーズに対応できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	区長や民生委員からも情報をもらえている。また、社協の「ボランティア友の会」所属のボランティアが定期的に来所している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族が希望するかかりつけ医となっている。通院には、職員が代行して付き添っていて、必要時には家族の協力がもらえている。	通院は全て職員が対応しており、家族には結果報告をしている。歯科医は、在宅診療に力をいれており、電話一本で往診していただいている。口腔ケアも月に2～3回定期的に実施されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職場内の看護師への相談、主治医のいる診療所の看護師であれば、平日には直ぐに連絡を取り指示を仰げる。また、隣接のデイサービスの看護師にも協力をもらえる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関関係者とは、情報交換をしながら家族が安心して治療に専念し、早期退院ができるように支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「急変時及び体調変化、重度化対応確認書」で入所時から意向確認をしながら、事業所での対応を説明している。体調の変化に合わせて、医療関係者とも相談しながら対応している。	入居契約時に、当法人特養への申し込みも同時に行っている。ホームの方針として、現状では看取りまで考えてない旨を説明し、重度化した際の可能な対応について「重度化対応確認書」として文書を交わしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員が、2年に1度の救急法を受講していて、消防署職員からのAED指導も受けている。ホーム内にもAEDを設置している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的な避難訓練や地域との訓練を実施している。また、この地域の「北又自主防災組織」に組み入れられていて、災害時には協力をもらえるような体制ができている。	昨年4月から、夜間2名体制になり職員の安心感も高まった。年2回の避難訓練は夜間想定で、消防署職員の指導で拡声器とストップウォッチを準備した他、避難完了サインに枕を廊下に出し鍵を閉めるをマニュアルに追加した。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉遣いや言葉がけのタイミング、声の大きさ等に配慮しながら、その場の状況に合わせた対応を心がけている。	呼びかける時は一人ひとり違うが、「さん付け」を基本としている。来客中は、「トイレ」等の直接的な言葉は使わない。またいつでも、どこでも「ノックと声かけ」を必ず実施している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員側で決めつけ、押しつける事がないように複数の選択肢を提案し、利用者が自分で意志決定できる場面を作るようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的なスケジュールはあるが、時間で区切った過ごし方はしていない。個人の体調に配慮しながらその時の気持ちを尊重し、できるだけ個別性のある支援をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	嗜好を把握しながら、本人の要望に添った対応をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は、季節や好みに配慮しながら職員がローテーションで作成している。また、利用者の能力と体調に応じて準備や片付けをしている。	楽しい食事を摂ることについて、職員間で話し合った結果、配膳は「箸」からとした。その後にお惣菜、味噌汁、ご飯を出している。これは、一人ひとりが自分の好きな食べ方をす、ということからまず「箸」、としている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者全員の水分量は、毎日把握している。食事量は、注意が必要な利用者のみチェックしている。また、栄養などの食に関する勉強会を法人の管理栄養士に講義してもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の歯磨きの声掛けをしたり、義歯の洗浄の支援をしている。また、利用者3名が歯科医院の口腔ケアを受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄のパターンやタイミングを考慮して声掛けしている。身体状況や皮膚状態から出来るだけ布パンツを使用できるように排泄の意思確認などをしながら支援をしている。	「生活様子ノート」を基に、一人ひとりの体調を把握し対応している。夜間は、基本的に熟睡していただくために、本人の動きが無い限り声掛けはしていない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個人毎に便秘対策をしながら便秘にならないような飲食物の工夫、特に繊維質、野菜、水分を多くしたり、運動のすすめをしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望の応じた入浴頻度、時間に添って対応している。毎月、自然の効能を利用しながら季節を感じられるような工夫をしている。また、気持ちや体調に合わせた声掛けでスムーズに入浴できるように支援している。	入浴を楽しむには、本人の気持ちを大事にして、無理強いはいしない。入りたいと思ってもらえるよう、これまで使っていた入浴剤は止めて、桃の葉、ゆず、菊の花、菖蒲等の自然が感じられる物を利用し好評である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調に合わせたペースで行動できるように配慮し、おやつや昼寝もしながら生活している。また、風船バレーや体操などで適度に運動をして、ぐっすり眠れるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人毎に服薬ファイルを作成し、すぐに見られるようにしている。また、服薬の変更等は、記録や申し送り等で確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	得意分野で、それぞれの力を発揮してもらえようように出来るような仕事は、お願いしている。また、把握している趣味等で気分転換してもらえようようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	体調や天候、季節等を考慮しながら支援している。その日に出かけられる場所を利用者と相談して決めたりしている。また、ボランティアの協力をもらいながら外出もしている。	入居者の平均年齢が87歳と高齢であり、あまり遠出は出来ないが、週に1~2回は買い物等に併せて外出している。ホームの周辺を散歩して公民館に立ち寄ってお茶の時もある。季節に応じて、加護坊山の桜、長沼の白鳥、色麻の芍薬等の楽しみもある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	少額でも自己管理している利用者もいる。また、回数は少ないが、買い物をして使えるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望に応じて家族や兄弟と連絡が取れるようにしている。年賀状を出している方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	フロアの飾りつけなどは、季節を感じていただけのように利用者へ手伝ってもらいながら、季節に応じた飾りつけを工夫している。特に温度には、注意しながら、明るさや音にも配慮している。	玄関を入ると、爽やかな季節の切り花が迎えてくれた。定期的に地元ボランティアの方が飾ってくれている。リビングでは、入居者がテレビ体操をしたり、童謡を歌ったり、入居者の趣味の作品が飾られて和やかな雰囲気に溢れている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアや廊下にフリースペースがあり、居室以外でも一人になりたい時や来客時の語らいの場になっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの物や好みの物を持ってきていただき、身体状況によっても使いやすいようにしている。新しい物は、自分の物ではないと言われることを家族にも理解してもらっている。	入居者の様態に合わせた対応がされており、床をマット式にして汚れた場合には部分的に取替えが出来る様にしている。一人ひとりの個性に合わせた飾りつけや、家具調度品等で落ち着いた空間をつくっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ひとりひとりの視点に合わせ、安心して安全な生活が送られるように状況や状態に合わせた環境整備をしている。		